『江湖風月集略註』研究（一〇）

禅研究所中世禅籍班

飯塚大展・佐藤俊晃・比留間健一・堀川貴司

はじめに

本稿は前稿に引き続き『江湖風月集略註』に関する校訂と注釈を行った成果である。読書会の参加者は、飯塚ほか、佐藤俊晃、比留間健一、堀川貴司の各氏である。読書会は、はじめに各自が担当者となり、頌一首ずつのレジュメを作成し、それをもとに共同で校合の確認と内容理解に関する討議を行ってきた。担当は、以下の通りである。

（126）無参（佐藤）（127）雪樵（比留間）（128）竹堂（堀川）（129）香厳撃竹（飯塚）（130）鞔更鼓（佐藤）（131）憩庵（比留間）（132）斗山（堀川）（133）笑峰（飯塚）（134）送人之廬山（佐藤）

【テキストについて】

（1）底本と対校本

底本①京都大学附属図書館所蔵『江湖風月集略註』（以下「京大本略註」）

対校②飯塚架蔵増上寺二念庵旧蔵寛永九年版『江湖風月集略註』（以下「寛永本」）

（2）参考史料

［『略註』（林下妙心寺派）系統］

③駒澤大学図書館所蔵『江湖風月集略註』大義写本（以下「大義写本」）

④飯塚架蔵寛永己酉（十年）版『江湖風月集略註鈔』（以下「略註鈔」）

［五山系統］

⑤龍門文庫所蔵『江湖風月集抄』（芳郷光隣・彭叔守仙抄、以下「龍門文庫本」）

⑥成簀堂文庫所蔵『襟帯集』
⑦駒澤大学図書館所蔵『江湖風月集夾山鈔』（以下、『夾山鈔』）

［洞門抄物系統］
⑧蓬左文庫所蔵『江湖風月集抄』（蓬左文庫本）

「林下大徳寺系統」
⑨足利学校遺跡図書館所蔵『江湖風月集抄』（「足利学校本」）

［妙心寺系統］
⑩京都大学文学部図書館所蔵『江湖風月集訓解添足』（無著道忠抄、以下「訓解添足」）

【翻刻凡例】

一、本史料翻刻に際しては、底本には、京都大学附属図書館所蔵『江湖風月集略註』（以下「京大本略註」）を用いる。

一、底本の翻刻の体裁は、頌の本文を太字とし、注釈の本文は改行二字下げとする。本文の行間や欄外に書写された抄文も、匡郭内の注の後に［欄外注］として翻刻する。傍注に関しては、第一句から第四句を順次ＡＢＣＤとして、該当箇所を指摘した後、［傍注］として翻刻する。

一、底本と寛永本との校合を行なう。なお、校合に関する注は、［校異］として脚注の形で行う。

一、「大義写本」、「略註鈔」は比較対照史料として、二段組で翻刻する。

一、翻刻に当たっては、異体字・略体字・別体字・俗字等は、現行の書体にて翻字する。省文等も同様である。また、明らかに誤写と思われる部分については、また脱字が明かな場合には、必要に応じて他のテキストを参考にし、注記する。

一、踊り字は、片仮名は「〻」、「ゞ」、漢字は、「々」、「々々」を用い、二字以上の「〳〵」も用いる。

一、合字の「㕮」「㕝」「㕛」「㕚」「㕜」は、それぞれコト、シテ（シタ）、ヨリ、トキ、トモに置き換えて翻字する。

一、濁音・促音等の表記は、原文のままに翻刻し、敢えて統一ははからない。

一、句読点に関しては、読解を便ならしむるために、適宜これを補う。

０１２６　無参

【京大本略註】

（三十）月洲ノ乗和尚

宝岩月洲法乗、嗣[*]簡翁敬、々嗣無準。或本云、乗嗣恵西岩、以宗派図考此義好。古[2]詩曰、有時乗明月、不覚過滄洲。続[*3]伝灯五、天寧月舟乗禅師、嗣西岩恵禅師、天寧月舟乗禅師作無参偈曰、得罷休時便罷休、云々。

（126）無参

号。

A 得ル罷休ヲ時ヲ且ク罷休セヨ（下二上スル）

B 南詢着ツクル甚麽ヲ来由ヲカ

C 情ニ知ル五十三ノ知識

D 門掩フ西風ヲ一様ノ秋

多年撥[*4]草参玄、無レ端打二失ス鼻孔ヲ一。是乃罷休之時節也。故ニ云、参ノ到テ無参ニ始是親ト。華[5]厳入法界品ニ、善財童子、展転南行シテ、経ニ由ス一百一十城一、参二詢ス五十三人ノ善知識一ニ。然[6]今従二罷参ノ田地一回顧スルノ則ハ、全無二来由一也。情[7]ハ者誠也。門[8]掩ーー者、無参故、門々不レ見二人来一也。

［欄外注］

古[9]人、有善財別后無消息、落日楼台一笛風之句。

善[10]財南詢、過一百一十城。到毘盧楼閣前曰、是解空無相無（作欠カ）之者所住処。弥勒弾指一声、楼閣門開。善財入已、閣門閉。見百千楼閣門、一々楼閣、有一弥勒、領諸眷属、并一善財、而立其前。

罷[11]参、休参、学事了畢之時節。

【出典】

『増集続伝灯録』巻五「天寧月舟禅師」章にこの詩が見える（続蔵一四二・四二七ｃ）。但し「且」を「便」に、「甚」を「什」

に作る。『禅宗雑毒海』巻七（寛文五年和刻本）には雪巌祖欽の作として同詩が見える。但し「時」を「兮」に、「且」を「便」に、「甚」を「什」に、「情」を「誰」に作る。

【校異】

＊嗣簡翁敬―恵西巌

＊続伝灯五……便罷休云々―ナシ

＊撥―発

【略註鈔】

（三十）**月洲乗和尚**

有時乗明月、不覚過滄洲ト云句ヨリ道号ヲ付シタソ。

（126）**無参**

号也。参禅了畢シテ隙アイタ底ソ。

A得テ罷休ノ時ヲ且ツ罷休ス

罷休ノ時節ヲ得テ罷休シタソ。

B南詢著ニ甚麽ヲ来由ヲカ

善財ノ南方ニ徧参シテ、百城ノ烟水ヲセ(12)、クリアルイタハ、何ノ用ソ。元トカラ参ゼウズコトハ無ソ。

C情トニ知ルニ五十三ヲ知識

善財ハ、五十三人ノ知識ニ参セラレタガ、是ハ無参ヂヤホトニ、参ズル者モ無イホトニ、

D門掩フレ西風ニ一様ノ秋

トレモ一様ニ、秋風ニ門ヲ閉テ居ラレタソ。人々具足(13)箇々円成ヂヤホトニ、向レ外ニ求ムベキコトハ無ソ。又元無シ二一法ノ与フレ一人ニヂヤホトニ、為ニシヤウスルコトモ無ソ。一烈無参ト作タソ。

【注（122）】

（1）宝岩月洲……此義好＝詩作者・月洲乗の法系について二説を挙げる。先ず無準師範―簡翁居敬―月洲法乗とする説。次に西岩恵に嗣ぐとする説。京大本は「宗派図」によって後者を取る。西岩了恵は無準の嗣。なお宝岩寺は浙江省衢州市にある。注（3）参照。

（2）古詩曰……不覚過滄洲＝作者名・月洲乗の道号法諱の由来としてこの詩句として引く。『略註鈔』もこれを引くが出典は未詳。

（3）続伝灯五……便罷休云々＝『増集続伝灯録』巻五「天童西岩恵禅師法嗣」中「天寧月舟禅師」章に、本詩が収録されている（続蔵一四二・四二七c）。【出典】参照。

（4）多年撥草参玄……始是親＝A句の注。撥草参玄は、草を撥って玄奥に参ずるの意。打失鼻孔は、本来の面目を失うの意。長年真理を求めて参究修行した果てにふと究極の処を失う、そこが罷休すなわち修行精進を止めて休息する時節。それゆえに実参修行は、参じ尽くして究極の無参に至ってはじめてその真義に契うことができる、とする。「参到無参始是親」について、『円悟録』巻二十の中「示択言禅人三偈」に「参禅参到無参処、窮玄窮徹玄尽頭」（大正蔵四七・八〇六a）という句があり、これを承けて「円悟師翁道、参禅参到無参処、参到無参始徹頭」（『五灯会元』「臨安府浄慈水庵師一禅師」章、続蔵一三八・四〇四d）と展開している例が見える。また『竜門文庫本』には「幸ニ罷休ヲ得タラハ、ヒッコウテイヨトナリ」と見える。ヒッコウテは引っ込んで、の意（『時代別国語大辞典・室町時代篇』）。

（5）華厳入法界品……善知識＝『華厳経』「入法界品」に登場するもの。善財童子が百十城を経て五十三人の善知識に遍参したことをいう。禅家では徹底した遍参修行の古例としてしばしば引かれる（例「不見善財童子従文殊発心、漸次南行過一百一十城、参五十三善知識」『大慧録』巻二五、大正蔵四七・九一六c―九一七a等）。

（6）然今……全無来由也＝B句「着甚麼来由」の注。遍参修行の究極に至った所から顧みれば、善財のように参ずるべき理由もない、という意。「着甚麼来由」について、『碧巌録』十五則に「著甚来由」の句があり、入矢義高はこれを「なんの来由にかよる」と注している（岩波文庫『碧巌録』上）。

（7）情者誠也＝情は副詞、まことに。この例は『大慧録』巻十八に「情知古人之意決不如此」（大正蔵四七・八八九a）、『碧巌録』巻十・九十五則に「情知你向第二頭道」（大正蔵四八・二一八a）と見えるほか、禅録に散見される。

（8）門掩ー者……不見人来也＝D句の注。すでに参ずる人も無いので門に訪れる人も無い、の意。『竜門文庫本』はCD句を注して「参スル人カナイホトニ、五十三人ノ知識ハ、イツレモ門ヲ西風ニ掩テヲルヘキソ、千聖不伝ノ処ナリ」と称揚する。また『啓蒙抄』は、C句を「南詢ノ由来モ入ラヌ無参チヤホトニ、参問ヲ受ル五十三ノ知識ノ有様ハ、第四句ノ云様ナラン」と注し、D句を「知識ノ門々ニハ誰参スル人モ無フテ、西風ノ秋ノ蕭条寂寥タル体ノ様

ニ、五十三人共ニ一様ニサヒカヘラメトソ」と注している。「サヒカへる」（寂返る）とは、物音一つせず、人のいる気配さえ感じられない静けさとなること（『時代別国語大辞典・室町時代篇』）。またD句について『首書』、『夾山抄』、『添足』は、柳宗元の「門掩侯虫秋、壁空残月空」の詩句の意であると注している。但し『全唐詩』巻三百五十一所収の柳宗元の詩「酬婁秀才寓居開元寺、早秋月夜病中見寄」では、「客有故園思、瀟湘生夜愁。病依居士室、夢繞羽人丘。味道憐知止、遺名得自求。壁空残月曙、門掩候蟲秋。謬委双金重、難征雑佩酬。碧霄無枉路、徒此助離憂」と見え、句順が異なっている。

（9）古人……一笛風之句＝出典未詳。善財がすべての善知識を遍参し終えた後の消息を、栄華の王朝が滅び去った悲嘆の情景になぞらえるもの。「落日」以下の句は、杜牧「題宣州開元寺水閣」（『全唐詩』巻五百二十二）に「六朝文物草連空、天澹雲閑今古同。鳥去鳥来山色裏、人歌人哭水声中。深秋簾幕千家雨、落日楼台一笛風。惆悵無因見范蠡、参差煙樹五湖東」と見える。

（10）善財南詢……而立其前＝善財が五十二番目の知識・弥勒の所に至り大楼閣に入る場面。字句に異同があるが、『禅宗頌古聯珠通集』巻四の中、「善財童子」五則の一つに「善財歴百十城、参五十三位善知識。後到毗盧楼閣前曰、是解空無相無作之所住處云云。見楼閣門閉。善財暫時斂念曰、大慈大悲願楼閣門開、令我得入。尋時弥勒領諸眷屬、至善財前、弾指一下、楼閣門開。善財得入、入已還閉、見百千万億楼閣、一一楼閣有一弥勒、領諸眷属、并有一善財、而在前立。弥勒復弾指云、善男子起、法性如是」（続蔵一一五・二〇d）と見え、京大本に近い。

（11）罷参休参学事了畢之時節＝参学参禅の終了をいう。『碧巌録』九十六則に「你若透得此三頌、便許你罷参」（大正蔵四八・二一九a）と見える。

（12）セ、クリアルイタ＝せせくりあるく（拵歩く）は、一つところに落着いていないで、あちらこちらを回って歩く意（『時代別国語大辞典・室町時代篇』）。

（13）人々具足……作タソ＝無参のありようを、すでに自己の内に具足しているゆえに外に求める必要も無く、また人に与えるものも無いゆえに、なにも為すことのない状態と解し、それこそが無参であるとする。一烈は一列に同じ。ここでは四句ともすべて無参と捉えることをいう。また一烈について『時代別国語大辞典・室町時代篇』に「特に禅宗において、連用修飾語に用いられ、全くその叙述通りであって、それ以外のものではないさまを強調して表す」とあり、「流レガ満水スレバ、鳥雁ナドモ聚テ心好ク羽ブルイヲシテ悦ブ、是ハ一烈伽藍ノ境地ノ底ダ」（『巨海代抄』）等の例を挙げる。これによれば一烈無参は、まさに無参そのものという意。

０１２７雪樵

【京大本略註】

（127）雪樵

号。

A 拶二到シテ孤峰不白ノ処ニ一

B 全身猶ヲ堕ス二棘林ノ中ニ一

C 到*レテ家ニ担子両頭脱ス

D 柴ハヲ自青ク兮火ハ自紅ナリ

(1)曹山寂*禅師、因僧問、雪覆二千山ヲ一、為甚麽孤峰不白。師云、須知有二コトヲ異中異一。問、如何是異中異。師曰、不堕諸山色。抄云、(2)柴青火紅、是本分之処也。所謂色々依二旧故一。(3)脱籠頭卸角駄、帰家穏坐、則依旧柴ハ青火ハ紅、無二別事一。

【出典】

『禅宗雑毒海』巻七（続蔵二四・九〇ｃ）。

【校異】

＊到家―至家　＊寂―曹寂

【略註鈔】

（127）雪樵

号也。

A 拶二到孤峰不白ノ処ニ一

(4)拶ハ逼也。拶到ハ、ツメ到ルト云義也。(5)孤峰不白ノ処ト云ヲハ、曹洞下テハ、異中異ト云テ高ク用ルソ。臨済下デハ、機関ナト、見テ低ク用ルソ。余ノ山ニハ雪ガ覆フタガ、ナゼニアノ孤峰ハ不レ白ゾト拶シテ見タマデソ。旧抄ニ、月洲ハ臨済宗ヂヤホトニ、曹洞ノ法門ヲバ用イマイトアレトモ、曹洞下ノ語ヲバ如レ其ノ用イ

デハ。拶到ニ一処ニタト云モ、

B全身猶堕ニ一棘林ノ中ニ一

ニ堕シタ物ヨ。棘林(6)ト云ヲ低ク云処モアレトモ、爰デハ高イゾ。去ナガラ、機(7)不レ離レ位ヲ、堕ニ在ス毒海ニ一チヤホトニ、高上本分之処ニモ堕スレハ、ワルイソ。雲門(8)云、平地上死人無数、透ニ過セハ荊棘林ヲ一者是レ好手ナラン ト一意ソ。又(9)薬山ノ語ニ、汝ガ父母通身紅爛シテ臥シテ在ニ荊棘林中ニ一ナト、アルゾ。アルカ、其(10)ノ棘林ノ中ニモ堕スレハ断絶スルゾ。堕セヌトキ、

C至レ家担子両頭脱ス

帰家穏坐ノ処ソ。爰ニ至テ見レハ、

D柴ハ自青ク穹火ハ自紅ナリ

迄ヂヤソ。現成ガ其儘本分也。雪(11)樵ノ二字ニ合テハ、一ノ句ハ雪也、二三四ハ皆ナ樵ノ字ナリ。

【注（27）】

（1）曹山……山色＝A句「孤峯不白」の出典を示した注。『五灯会元』巻十三に「問、雪覆千山。為甚麽孤峰不白。師曰、須知有異中異。曰、如何是異中異。師曰、不堕諸山色。」（続蔵一三八・二三九ａ）とあるのに拠る。曹山禅師に僧が「雪が多くの山を覆っている中になぜ一つだけ白くない峰（＝孤峯不白）があるのか」と問うと、師は「異なる中にも特に異なるものがあるのを知らなければならない」と答えた。「異なる中の特に異なるものとはいかなるものか」と問うと、師の答えは「凡百の山の色といっしょにならないことである」。

（2）柴青……依旧故＝底本は「旧故に依る」と訓読しているが、版本では「旧に依る故なり」とする。柴が青く火が紅なのは、それぞれの本分である。それぞれのありようは、もとのままだからである。

（3）脱籠……別事＝C句への注。家に帰って荷を下ろすという共通点から『碧巌録』などに見える語を引く。「脱籠……角馱」は、おもがい（＝くつわを固定するために、馬の顔につける緒）をはずし、鞍の荷をおろす。束縛から自由になる。このようになれば、本来の場に落ち着き（帰家穏坐）、柴は青、火は紅という元通りの色で、特別なことはない。『碧巌録』二十一則垂示に「建法幢立宗旨、錦上鋪花。脱籠頭卸角馱、太平時節」（大正蔵四八・一六一ｃ）とある。

（4）拶ハ……義也＝『古今韻会挙要』二十七「拶」に「子末切。逼也。韓雪詩、崩騰相排拶」とある。

（5）孤峰……見タマデソ＝「孤峰不白処」を曹洞下では「異中異」といっ

て重い意味で用いる。臨済下では機関（＝修行者を導く小手先の手だて）と見て、軽い意味で用いる。「ほかの山は雪が覆っているのに、なぜあの峰だけ白くないのか」と相手を試しただけのことである。

（6）棘林ト……高イゾ＝棘林を修行の場として低く見る場合もあるが、ここでは高い。（8）（9）で高い例が示される。

（7）機不……毒海＝『碧巌録』二十五垂示に見える語（大正蔵四八・一六五c）。働きは自在でなければ毒海にはまりこむのだから、高い境地にあってもそこに安住するならば、悪いことである。

（8）雲門……好手＝『雲門広録』巻二に「師有時云、平地上死人無数、過得荊棘林者是好手」（大正蔵四七・五五四b）とあり、『五灯会元』巻十五にも同文が載る（続蔵一三八・二八〇a）。荊棘林がよい修行の場であることを言う。

（9）又薬山……荊棘林中＝『景徳伝灯録』巻十四薬山章に「師曰、汝父母遍身紅爛臥在荊棘林中、汝帰何所。」（大正蔵五一・三一一c）とあるのに拠る。これも、荊棘林がよい修行の場であることを言ったもの。

（10）其棘林……帰家穏坐ノ処ソ＝その棘林でも、安住すれば修行は断絶する。安住しないとき、本来の場に落ち着く。

（11）雪樵ノ……字ナリ＝雪・樵の二字を割り振ると第一句は雪、他の句は樵である。

0128

【京大本略註】

（128）竹堂

号。

A 曲(キヨク)**々斜々垂示ノ処**ロ

B 也タ**知多福ノ老婆心**

C 若シ**還**マタ**真正**ニ**挙揚**シ**去**ハ

D 荒草階前一丈深(カラン)

僧[1]問多福、如何是多福一叢竹。師云、一茎両茎斜。僧云、学人不会。師曰、三茎四茎曲。長[2]沙岑禅師上堂曰、我若真正挙揚去、法堂前草深一丈。普[3]灯録第四、黄龍祖心因読伝灯、至多福一叢竹、於此頓証云。*

［欄外注］
杭州多福和尚。
［傍注］
A　竹。(4)

【出典】
不明。

【校異】
＊云―云云

【略註鈔】
（128）竹堂
号也。
A曲々斜々垂示ノ処
多福(5)ニ如何是多福一叢竹ト問タレハ、一茎両茎ハ斜ニ、三茎四茎ハ曲レリ、ト答話シタガ垂示ゾ。多福ノ一茎ーー曲ト云ハズトモ、垂示ガ皆斜曲ゾ。
B也タ知ル多福ノ老婆心
垂示スルガ老婆心也。
C若シマタ還マタ真正ニコ挙揚シ去ラハ
真正ニ挙揚セバ、一言モ放サズ掃イ立テ、行ズヘキゾ。(6)
サアラウニハ、
D荒草階前一丈深カラン
法堂前草深コト一丈デ、誰デモヨリ付ク者ハアルマジキソ。竹(7)堂ノ二字ニ合テハ、一二ノ句ハ竹ノ字ヲ打ス。三四ハ堂ノ字ヲ打スナリ。竹ヲ不秋草ト云ホトニ、荒草ト云処ニ竹ノ字モアルトイヘトモ、アマリコウヘイスギタゾ。

【注（128）】

（1）僧問多福……四茎曲＝『景徳伝灯録』巻十一に「杭州多福和尚、僧問、如何是多福一叢竹。師曰、一茎両茎斜。曰、学人不会。師曰、三茎四茎曲」（大正蔵五一・二八七c）とある問答。『五灯会元』『嘉泰普灯録』等にも見える。欄外注もこれを指すものであろう。

（2）長沙岑……深一丈＝『景徳伝灯録』巻十に「湖南長沙景岑号招賢大師、（中略）上堂曰、我若一向挙揚宗教、法堂裏須草深一丈。我事不獲已、所以向汝諸人道（下略）」（大正蔵五一・二七四a）とあるが、『聯灯会要』巻六に「示衆云、我若一向挙揚宗教、法堂前草深一丈」（続蔵一三六・二六八c）とあるのが近いか。「真正」とする本文は『剣関子益禅師語録』巻一・小参に「真正挙揚、法堂前草深一丈」（続蔵一二二・四五a）など、法語中に引かれる場合にいくつか見られる。

（3）普灯録……於此頓証云＝『嘉泰普灯録』巻四・黄龍祖心禅師章に「因読伝灯、至僧問多福、如何是多福一叢竹、曰、一茎両茎斜、云、学人不会、曰、三茎四茎曲、於是頓証明二師垂手処」（続蔵一三七・四三b）とある。「二師」はそれまで師事していた雲峰文悦と黄龍慧南。『略註抄』が述べるように、多福の答えが弟子を導く老婆心であることをこの逸話が証明しているので、ここに引かれたのだろう。

（4）竹＝A句は「竹堂」のうち「竹」を詠む、の意。

（5）多福ニ如何……斜曲ゾ＝注（1）所引の問答について述べる。師の禅風を比喩的に尋ねたつもりだった僧の問いかけに対して、多福は竹そのものの形状をありのまま、しかも二度にわたって答えた。これこそが弟子を導く親切な（老婆心を持った）垂示になっている、というもの。

（6）真正ニ……アルマジキソ＝本当に禅の教えの厳しさを示すのであれば、無言のまま追い払っただろうが、それでは教えを聞きに来る者はいなくなり、法堂の前は草ぼうぼうだろう。だから、AB句に示したような老婆心も必要だ、と諭している、というもの。

（7）竹堂ノ二字……スギタゾ＝前半二句が「竹」、後半二句が「堂」を表現したもので、竹の別名「不秋草」からすればD句「荒草」に「竹」の意を含ませたとも考えられるが、これはあまりに頭でっかちの見方だ、とする。「竜門文庫本」『襟帯集』とも「不秋草」を根拠にD句を「竹」とすることを否定する。「竜門文庫本」はさらに、彭叔守仙の意見（『瓢謂』）として、C句「挙揚」に竹、A句「垂示」に堂の意を含むか、とも言う。「不秋草」は、金の馬天来の詩「賦丹霞下寺竹」に「天人解種不秋草、欲界独為無色花」とある。この詩は金・元好問編『中州集』に収められ、万里集九『梅花無尽蔵』一「題扇面竹」に「指竹呼花宋末言、毎看尚帯不秋姿」、その自注に「呼竹為無色花・不秋草、見中州集」とある（五山文学新集六・六六五）。「コウヘイ」はこまっしゃくれた子どものことや、あまりにこじつけな解釈に対して用いる語で、『時代別国語大辞典室町時代編』では『襟帯集』のこの部分（『略註鈔』とほぼ同文）が用例として挙げられ

ている。

0129香厳撃竹

【京大本『略註』】

（三一）**九峰ノ昇和尚**

瑞州九峰山高四（西カ）五十里、其峰奇秀*。

（129）香厳ノ撃竹

一本此篇以為月洲作之内。

A放下シテ身心ヲ如ニ弊等ノ一

B拈シ来レハ瓦礫モ是レ黄金

C驀然トシテ一下ニ打得着

D大地山河一法沈ム

香厳禾上泣テ辞ニ潙山ヲ。直ニ抵（イタッテ）南陽ニ、覩テ忠国師ノ遺跡ヲ、遂ニ憩止ス焉。一日因ニ芟（カッテ）レ草ヲ、以ニ瓦礫一ニ撃レ竹作レ声、忽然省悟ス。遥ニ礼ニ潙山ヲ、讃シテ云、和尚大悲、恩踰（コエタリ）ニ父母一ニ。当時若為ニ我説破セハ、何ソ有ン今日之事一。乃有ニ一偈一ニ云、一撃忘ニ所知ヲ一、更不レ仮ニ修治一ヲ、動容ニ揚ク古路ヲ一、不レ堕*ニ悄然ノ機一ニ、処々無ニ蹤跡一、声色ノ外ノ威儀、諸方達道ノ者、咸（ミナ）言上々ノ機ト。聞偃渓住ス香山一ニ、除夜小参、一法若有ナレハ、山河大地平沈ス、万法若無ナレハ、森羅万象顕煥*。

［欄外注］

(5)此集凡載其本貫。率庵載住院寺。此九峰者、寺耶号、定非生縁。

(6)一撃之下、大地山河、和一法而平沈了也。一法也不立也。

(7)古人云、一法若有、毘盧堕在凡夫、万法若無、普賢失其境界。

【出典】

『禅宗頌古聯珠通集』巻二十五（続蔵一一五・一五九b）。またAB句が『禅林句集』に引用される。

【校異】

＊秀―秀古抄云師承未考　＊堕悄―随消　＊煥―煥古人云一法若有毘盧堕在凡夫万法若無普賢失其境界

【略註鈔】

（三一）**九峰昇禅師**

（129）**香厳撃竹**

A放下身心如弊箒

香厳ノ、瓦礫テ竹ヲ打ツ声ヲ聞テ悟ラレタヲ頌シタソ。

身心トモニ放下シテ、古ル箒ノヤウニナラレタソ。

B拈来瓦礫是黄金

如此無心ニナリ得レハ、瓦礫ヲ取タモ黄金ソ。悟リニモ次第ガアルソ。始ハ心機意識ガ休ムソ。次ニハ如来禅ヲ会スルソ。終ニハ祖師禅ヲ会スルソ。サルホトニ、大悟十八度小悟無数ト云タモ、ウソテハ無ゾ。

C驀然一下打得著

竹ニ瓦ヲ、ハツチトハキアテタ処ソ。悟入ノ処タソ。

D大地山河一法沈

大地山河ハ、何ンニモ無ソ。山河大地ノ万法ハ、自己カラ出タゾ。ホトニ、悟入ノ処デ、尽ク又自己ニ帰シタソ。トキ、大地山河ハ、一法モ無ソ。心生レハ種々ノ法生シ、心滅スレハ種々ノ法滅スト一意ナリ。

【注（129）】

（1）瑞州九峰山高四五十里其峰奇秀＝『方輿勝覧』巻二十、「瑞州」の項に「九峰山〈在上高西五十里、其峰奇秀〉」と見え、また、『大明一統志』巻五十七には「九峰山、在上高県西五十里、其峰有九」とある。九峰山は「瑞州（江西省高安県）」に所在する。「寛永本」には「古抄云、師承未考」とあり、『訓解添足』は、「此ノ七字、東陽ノ之本傍注也」と指摘する。「九峰昇和尚」については未詳。

（2）一本此篇以為月洲作之内＝別本に本偈頌の作者を一つ前の月洲法乗の作とすることを言う。五山版等、管見の伝本では見出せない。

（3）香厳禾上泣辞……咸言上々機＝ＡＢ句の注。『五灯会元』巻九「香厳智閑」章（続蔵一三八・一六四ａ）に見える一文が最も近似し、典拠かと推察する。『訓解添足』は『景徳伝灯録』巻十一「香厳」章を典拠に上げる。偈の題に見るとおり、「香厳撃竹」の話頭を主題とするが、ここでは表現としても「弊箒」と「瓦礫」をその詩句として用いている。「香厳撃竹」の話は、「見桃花悟道」が「見色明心」の話として有名なように、「聞声悟道」の典型とされる。香厳は、潙山との機縁叶わず、そのもとを離れ、南陽慧忠の故地にとどまり、草刈りの作務をしていた。その時、瓦礫が飛んで竹にぶつかる音を聞いて、忽然として大悟した。潙山を讃歎礼拝して言うことには、「師の大慈悲の法恩は、父母の恩を遥かに越える。あのとき、もし総てを説き尽くされたならば、今日の悟りはあり得なかった」と。そこで一偈を作って言う、「あの一撃の音を聞いて知識のとらわれを無くし、全く修行の必要がなくなった。自らの振る舞いは先聖の道を挙揚し、しかもひっそりとした（無事）の機にも落ち込まない。処々に在ってもその跡形はなく、それはそのまま現象世界の外側の営為に外ならない。諸方の達道者は、こぞってこの上ない機用だと讃嘆する」と。因みに、この話頭には、前段階がある。香厳智閑が久しく百丈懐海会下に学び、香厳は、一を問えば十を答えるような聡明霊利の漢として知られていたが、百丈懐海の遷化により、潙山霊祐に参ずる事になった。潙山に「生死の根本、父母未生の時、試みに一句道い看よ」と問われ、只忘然とするばかりだった。その後も日来見聞し身に付けた知識では、契当することは叶わなかった。そこで、自己の見識が画餅に過ぎないと知り、教えを請うが、潙山は「今お前に法を説けば、後々お前はその事を悔いて私を呵罵することになろう。私の説く法は私だけのものであり、お前の悟りとは全く関わりが無い」と言って、説くことはなかった。香厳は、今まで書き留めた文字言句をを全て焼却し、一生仏法を学ばないと決意し、一人の長行粥飯僧（一介の修行僧）となり、もはや心を疲れさせることから解放された。やがて潙山のもとを離れた。上記の話が、「香厳撃竹」の話の前提となる。「長行粥飯」（常に粥飯を行ずる）とは、「粥飯因縁」が坐禅学道の意とされることから、叢林の修行弁道をするの意であり、ここでは一介の修行僧となる、の意か。

（4）聞偃渓住香山……森羅万象顕煥＝『偃渓広聞語録』巻一「香山寺語録」に「除夜小参、一法若有、山河大地平沈。万法若無、森羅

萬像顕煥。旧歳今宵去、去去実不去、新年明日来、来来実不来。撃払子云、尽向者裡、一時撃砕了也。一法万法、新年旧年、大地全収、千差一挙。絶去来、没回互、回時更相渉、不尓依位住」（続蔵一二一・一三一ａ）と見える。若し一法があるとすれば、現前の世界は（その一法と共に）埋没してしまう。若しあらゆる法が存在しないとすれば、あらゆる事象は明らかにきらめく、の意か。

（5）此集凡載……定非生縁＝『江湖風月集』における偈頌の作者名については、法諱に本貫（生縁の地）を冠する表記が多いが、率庵梵琮のように、住した寺院名を冠する場合もある。この九峰は、寺院名なのか道号なのか、きっと生縁ではあるまい、と注する。

（6）一撃之下……一法也不立也＝香厳が撃竹の音を聞いた時、現前の世界はその一法（香厳の悟り）とともに空無に帰した。もはや香厳の悟りすら措定し得ない、あらゆる認識も言葉も介在する事のできない世界。

（7）古人云一法若有……普賢失其境界＝注（4）に関する注。『円悟語録』巻二（大正蔵四七・七一八ｃ）にみえる語。一法が確かに有るとすれば、毘盧舎那仏も凡夫の境界に堕在する、万法（あらゆる事象）が存在しないとすれば、普賢菩薩はその境界を失う、の意。仏菩薩も有無の相待に落ち込めば、その悟境は失われる、の意か。偃渓広聞の語では、一法を在るとする考え方を抑下し、万法を措定しないありかたを托上する。有無相待の枠組みそのものを否定する、円吾の説は、偃渓のそれとは異なっている様に見える。

（8）香厳ノ瓦礫テ……ニナラレタソ＝本偈頌は「香厳撃竹」の話頭を主題とする偈頌である。A句は、身心を放下して、役に立たない（機能しない）古箒のようになる（働きの無い境界に到る）。「龍門文庫本」は「放下ーー、弊帚ハ、何ノ役ニモ不レ立物也。第一句、身心ヲ閑事ト看タ上テハ、物トシテ無レ不ストコト云這个ニ」とある。『襟帯集』も「撃レ竹聲ヲ聞テ悟テ、潙山ノ細ニ説テキカセラレタハ、今日ノ悟ハアルマイト云テ、頌ヲツクラレタソ。潙山ノ此子徹也ト云ワレタソ。仰山ノ此ヲ聞テ、心機意識ハ侭タト云ワレタ。曹洞宗ニハ、コヽラヲ正位一色ト云ケナソ。仰山ノ法眷チヤ呈ニ、マヘキハリキハツテ作ラレヨト云ワレタ処テ、又作ラレタ。一ノ句、身ト云モ心ト云モ、スツト放下シテ、如寒灰弊帚ト思ウソ」と注する

（9）如此無心ニ……ウソテハ無ゾ＝我が身心を放下して、無心の境地に至れば、瓦や小石の様なつまらない物も、黄金ノ価値を持つ、の意。のみならず、総ては等価に黄金となるの意を含む。後半部は、悟道の階位について言う。第一段階は、心の働き、意識が休歇し（無心の境地に到り）、第二段階では、如来禅の境地を会得し、第三段階で終に祖師禅の境地に到達する。上来の段階の悟りを前提にすれば、大慧宗杲が「大悟十八度小悟無数」と云ったとするのも、決して虚言では無い、の意。「如来禅」「祖師禅」については、『五灯会元』巻九に「潙山聞得、謂仰山曰、此子徹也。仰曰、此是心機意識、著述得成。待某甲親自勘過。仰後見師曰、和尚、讃歎師弟、発明大事。你試説看。師挙前頌、仰曰、此是夙習記持而成。若有正悟、別更説看。

師又成頌曰、去年貧、未是貧、今年貧、始是貧、去年貧、猶有卓錐之地、今年貧、錐也無。仰曰、如来禅許師弟会、祖師禅未夢見在」（続蔵一三八・一六四ａ）とあり、仰山は、潙山が香厳の悟道を印可したのに対して、仰山は、抑下して、如来禅の会得で在る事は認めるが、祖師禅については全く及びもつかないと言った事を踏まえる。同様の記事が『祖庭事苑』巻一「如来禅」（続蔵一一三・八ｃ）に見える。「大悟十八度小悟無数」については、看話禅の大成者である大慧の悟道を示す語として用いられる。この語句については、野口善教氏の「大慧宗杲と大悟小悟の二句」（臨済宗妙心寺派教学研究紀要』（第一一号、臨済宗妙心寺派教化センター、二〇一三年））に詳しい。野口氏に拠れば、大慧の語録をはじめとする著述や、その伝記資料類には見えず、大慧自身の言葉としての典拠は見出せない。この語が広まった契機は、雲棲袾宏『竹窓二筆』「大悟小悟」にあり、その渕源は、宋濂撰「寂照円明大禅師壁峰金公設利塔碑銘」にみえる「妙喜大悟十有八、小悟無算」に由来するという。『襟帯集』は、「ソレ程ノ位（寒灰弊帚）ニナツタラハ、二ノ句、ヲカシイ瓦礫ヲ取テアクルモ、黄金ソ。コ、ニ三重ノ悟リカアル也。始ハ心機意識ガ止ソ。次ニハ会スル如来禅ヲ、終ニハ会ニ祖師禅ヲ一。由是観レハ、大悟十八度小悟無数ト云モ、ソラコトテハ無イソ」と見え、同様に注する。「龍門文庫本」は、「拈来レハーー。瓦礫ヲ以テ、竹ヲ打テ、悟故也。言ハヾ第一ニ、身心ヲ閑事ト看タ上テハ、物トシテ無レ不ニ云コト這个ニ一」と注しており、Ｂ句について、Ａ句で身心を無用の物と看取した上では、あらゆる物が「這箇（真実）」に外ならない、とする。「瓦礫」と「黄金」との関係性を「閑事」と「這箇」の対として注する。『訓解添足』は、「第一二ノ句、香厳為レニ道ノ、放ニ下シテ身心ヲ一、到ルコトニ無心ニ一、如ニシテ弊帚ノ不ルカ一レ可レ用、既ニ左右逢レ原ニ一、拈ニ箇ノ瓦片ヲ一、亦是為ニ黄金ト一也。奈何センニ猶是存スルヲ玄妙理性ヲ也。此ハ頌ニ撃竹已前ヲ一」とあり、ＡＢ句は、身心を放下して、無心の境地に到るも、「玄妙理性」（悟りという聖解）が残存しているのはどうしようもない、従って、香厳の撃竹以前の境界を指すという。

（10）竹ニ瓦ヲ……悟入ノ処タソ＝香厳が掃いている折、勢いよく竹に瓦を当てた、その撃竹の端的が悟入の当処だとする。

（11）大地山河ハ……種々法滅ト一意＝撃竹の当頭に、山河大地の万象は無くなる。それらは自己から生じたものであり、悟入の時、万法は自己に帰着する。その時、山河大地、一法もない、の意。「心生レハ種々ノ法生シ、心滅スレハ種々ノ法滅」は、『大乗起信論』巻一「以心生則種種法生、心滅則種種法滅故」（大正蔵三二・五七七ｂ）が原拠であり、『臨済録』には、「道流、尓欲得作仏、莫随万物。心生種種法生、心滅種種法滅、一心不生、万法無咎。世与出世、無仏無法、亦不現前、亦不曽失（下略）」（大正蔵四七・五〇二ｂ）と見える。

０１３０　鞔更鼓

【京大本略註】

(130) 鞔ハル更鼓テイ*ヲ一

A 爛木頭辺釘々着

B 死牛皮ニ有リ活機関一

C 須弥ノ槌子軽シク拈出ス

D 撼ニ動シテ一天ノ星斗ヲ一寒ムシ

爛木(1)ー一者、鼓之箇(筒カ)*也。釘々着(2)ハ、上釘ハ平声、下釘ハ去声也。須弥(3)槌者、塩官示衆ニ云、虚空為レ鼓、須弥レ為レ槌、甚麽人カ打得ン。衆、無レ語。南泉聞テ云、王老師、不レ打ニ這破鼓。智論(4)*云、譬ハ如牛皮、未レ柔不可屈折、無信人亦如是。譬如牛皮已柔、随用可作、有信人亦如是。

[欄外注]

杜(5)詩、五更鼓角声悲壮、三峠星河影動揺。

【出典】

未詳。『重刊貞和類聚祖苑聯芳集』巻八「法器」に、九峰作「鞔更鼓」として同詩を出す。但し「拈出」を「拈起」に、「一天」を「半天」に作る。『襟帯集』にも「一天」の傍注に「半イ」と見える。また五山版は「釘々」を「丁釘」に、「一天」を「半天」に作る。

【校異】

＊（題註ナシ）―智論云譬如牛皮未柔不可屈折無信人亦如是譬如牛皮已柔随用可作有信人亦如此

＊箇―筒

＊智論云……有信人亦如是―ナシ

【略註鈔】

（130）鞔ル更鼓

時[6]ノ大鼓ノ破レタヲハリナヲシタソ。

A爛木頭辺釘々着

B死牛皮ニ有二活機関一

爛木トハ古イ鼓ノ筒ノタ、レタヲ云ソ。上[7]ノ釘ハ平声、下ノ釘ハ去声ソ。釘キノトキハ平声、釘ギウツト云トキハ去声ソ。平生ハ体ノトキハ反[ハカ]デ、用ノトキハ軽イホトニ平ゾアル。爰デハ体ノトキハ平、用ノトキハ仄ソ。古ル筒ニ皮ヲ釘ヲ以テヒシ〳〵ト打着タゾ。死[8]牛皮有一一関、死牛皮ヲ以テハツタレトモ、打テバドウ〳〵ト鳴ルハ活機関ソ。是ヲハナンテ打フソ。

C須弥ノ槌子軽ク拈出ス

虚空ヲ為レ鼓ト、須弥ヲ為レ槌ト云ガ、塩官ノ語ソホトニ、此鼓ヲハ須弥ノ槌ヲ以テ打タソ。此ノ鼓ヲ虚空ノ鼓ニ云イナシタゾ。

D撼二動シテ一天ノ星斗ヲ一寒マシ

須弥ノ槌ヲ以テ虚空ノ鼓ヲ打タホトニ、撼二動スル一天ノ星斗ヲ一也。一天ノ星斗モ虚空ノ中ヂヤホトニ、撼動セイテハ。底[9]意ハ、爛木頭ハ、五尺ノ形骸也。死牛皮ハ、四大五蘊也。活機関トハ、死中ニ得レ活義也。須弥ノ槌トハ、正師家ノ鉗鎚ヲ云也。撼動ーートハ、虚空ト自己ト無二チヤホトニ、一天ノ星斗ノ撼動スルト云処デ、自己ノ活動スルハ聞ヘタソ。言語シタモ談笑シタモ、自己ノ撼動シヤウソ。

【注（130）】

（1）爛木……鼓之箇也＝爛木頭辺とは鼓の木筒のことという注。爛木頭は朽ちた木のこと。ちなみに『添足』に「叢林、更点を鳴ず。点には版を用い、更には鼓を用う」とある。初夜（午後八時）より暁天（午前四時）までを五分して五更とし、一更を五分して五点とする。

（2）釘々着……去声也＝「釘」は平声の場合は名詞、去声の場合は釘打つという動詞となる。なお「着」は動詞の後につけて動作や行為の継続または達成をいう。

（3）須弥槌者……這破鼓＝C句の注。塩官斉安の話は『景徳伝灯録』巻七に「師一日謂衆曰、虚空為鼓須弥為椎。什麼人打得。衆無対。有人挙似南泉。南泉云、王老師不打遮破鼓。法眼別云、王老師不打」（大正蔵五一・二五四a）と見えるほか、『祖庭事苑』巻一（続蔵一一三・一三d）、『禅宗頌古聯珠通集』巻一一（続蔵一一三・六五c）他に見えるが、それぞれ字句に若干の違いがある。虚空を鼓に、須弥を槌に譬える言い方は禅録に散見されるが、『祖庭事苑』巻一「虚空為鼓」（続蔵一一三・一六c）項では『宝積経』の所説を典拠としている。すなわち『宝積経』巻百二に、須菩提が世尊に語る言葉に次のように見える。「我若入定、正使有人具大神力、能以百億四天下為一大鼓、取須弥山為一大槌、於我定時、令一大人住在我前、執彼大槌撾撃大鼓、無暫休廃、乃至経劫、如是鼓声尚不入耳、何況乱心能令我出」（大正蔵一一・五七五b）。もし入定したならば、たとえ百億の四天下を大鼓とし、須弥山を大槌として撃つ大音声を発したとしても、定から出ることはないという意。

（4）智論云……亦如是＝B句「牛皮」の注。牛皮の語にちなみ、『大智度論』の信の有無を説く際の牛皮の譬喩を出す。すなわち『大智度論』巻一に「問曰、諸仏経何以故、初称如是語。答曰、仏法大海信為能入、智為能度。如是義者、即是信。若人心中有信清浄、是人能入仏法。若無信是人不能入仏法。不信者、言是事不如是、是不信相。信者、言是事如是。譬如牛皮未柔不可屈折、無信人亦如是。譬如牛皮已柔隨用可作、有信人亦如是」（大正蔵二五・六二c－六三a）と見える。ここでは無信の者は何かを聞いても「不如是」とするが、それはまだなめしていない皮を折り曲げることができないと同じで、それに対して有信の者は聞いたことをそのまま「如是」と受けとめる、これは柔らかくなった皮が用途に随って曲がるようなものと言っている。なおこの『大智度論』の引用文は、『京大本』では注本文の末尾に追補したような体裁になっていて、『寛永版本』では【校異】に記したように題注の体裁で入れてある。これについて『訓解添足』に「東陽本、冠註書之、後人誤入題註也」と注している。

（5）杜詩……影動揺＝詩題「更鼓」にちなみ更を告げる太鼓の例を挙げる。『杜少陵先生分類集註』巻二十三・七言律「閣夜」に「歳暮陰陽催短景、天涯霜雪霽寒宵、五更鼓角声悲壮、三峡星河影動揺、野哭千家聞戦伐、夷歌幾処起漁樵、臥龍躍馬終黄土、人事音書久寂寥」と見える。五更は午前四時頃。鼓角は、軍隊で時刻を知らせる

ために鳴らす太鼓と角笛。

（6）時ノ大鼓……シタソ＝鞔は革を張るの意。禅林において太鼓の皮の張り替えに際して偈頌・法語を述べる例は禅録に散見される。例えば『大慧録』巻三「新鞔法鼓歳旦上堂」（大正蔵四七・八二一c）、『禅宗雑毒海』巻四「重鞔法鼓」呆翁悦（続蔵一一四・七三b）等。また『夾山抄』頭注に「古イ大鼓ノ筒ヲ、牛皮ヲ以鞔テ其縁ヲ釘ヲ以ヒシト打着ス」と見える。

（7）上ノ釘ハ……トキハ仄ソ＝注（2）でも「釘」の平声と去声の違いは触れたが、ここではさらに体用に当てはめて注する。体は釘という本体、この場合は平声。用は釘打つという作用、この場合は仄声。『襟帯集』にも類似の注が見える。

（8）死牛皮……ナンテ打フソ＝B句の死牛皮と活機関を対比的に解する注。『啓蒙抄』に「活機関カア郎、死活ノ相対一句ノ字法巧ナリ」と見える。

（9）底意ハ……撼動シヤウソ＝爛木頭を人間の死骸に、死牛皮を四大五蘊に見ているが、いずれも命のないもの。これに須弥の槌に見立てた師家の鉗鎚を下して、死中に活を得るとする。虚空の鼓―一天ノ星斗―自己を同義のものと捉え、須弥の槌によって虚空の鼓である天の星が撼動するように、師家の鉄槌を得て自己の活動が果たされる、と詩の底意を注する。『襟帯集』にも類似の注が見える。「寒」は、恐ろしいほどに凄みがあるという意。禅録に散見される。例えば『景徳伝灯録』巻十六「鄆州四禅和尚」章に「問如何是和尚家風。師曰、会得底人意、須知月色寒」（大正蔵五一・三三二b）等。『訓解添足』に「寒字、衲僧分上恰好也」と見える。

0131憩庵

【京大本略註】

（131）憩庵

号。

A外息（カヤムルモ）二**諸縁**ヲ一**魚止**（トドマルレキ）レ**藥**ニ

B内心無（モレ）**喘**（コト）**鳥栖**（ムレ）**芦**ニ

C老胡開（テ）二**這**（ヒ）**般**（ノ）**門**（モン）**戸**（ヲ）一

D帯（太）二**累**（シテ）**児孫**（ソンヲ）一**在**（アリ・ラシム）一**半途**（トニ）

達磨大師謂二祖云、汝外息二諸縁一、内心無レ喘コト、心如ニシテ二墻壁一、可三以入二レ道一ニ。魚止藥者、肇法師宝蔵論曰、夫レ進レ道ニ之由、

中ニ有二万途一。困魚止レ*藥、病鳥栖レ芦。説者曰、此レ挙レテ事ヲ以況レタトフ漸ニ。言、学者進悟之心由也。途、道也。即八万四千ノ法門、随テ機ニ各解ス。如二困魚ーレー、病鳥ーレー、雖モ二各得レ所ヲ安ト一、倶未レ至二於大海深林ニ一云。藥ハ[3]者死水也。夫レ[4]称シテ天竺ヲ為ハレ胡ト、自二秦晋一沿襲シテ、而来卒ニ難シ二変革一シ。故名レ仏ヲ為二老胡ト一、祖ヲ為二碧眼胡ト一。凡釈氏ノ子、而名為二胡種族ト一。半途者、憩息也。*半途者、化城未到宝所、而於中道止息之地也。見于法花三巻化城喩品第七。

【欄外注】

アエグ。

[6]如今要見黄頭老、刹々塵々在半途、碧二十四。

[7]藥或作箔。

【傍注】

A　憩。

B「喘」息、気也。息者、憩義。

C「這般」者半。

【出典】

『禅宗雑毒海』巻七C句「這般」を「者般」とする（続蔵二四・九二a）。

【校異】

＊困魚ーー病鳥ーーー困魚止藥病鳥栖蘆

＊半途者化城未到宝所而於中道止息之地也見于法花三巻化城喩品第七ー法華三巻化城喩品化城未到宝所而於中道止息之地也

【略註鈔】

（131）憩庵

号也。憩ハヤスムナリ。家ニ行キ着ズシテ、半途ニヤスム義也。

A 外息ムルモ諸縁ヲ魚止マルレ濼ニ

B 内心無キモ喘鳥栖ムレ蘆ニ

達磨ノ、外息諸縁ヲ内心無レ喘トヲシナツタモ、方便ヂヤヲ、是ト心得テ、本分ノ宗旨ヲ会セヌハ、魚ノ濼ニ止リ鳥ノ蘆ニ棲ダガ如クゾ。濼[9]ハ止水也。魚モ止水ニ止テ大海ニ至ラズ、鳥モ蘆ニ宿シテ深林ニ至ラヌコソ、半途ニヤスムダコトヨ。

C 老胡開ニ這般ノ門戸ヲ

老[10]胡ハ達磨也。這[11]般ノ門戸トハ、外息ーー内心ーートヲサス。是ガ方便説化城也。実城ニアラス、故ニ、ノヤウニ心得ルガ、実城ニ不レ至シテ半途ニアルモノソ。

D 帯ニ累シテ児孫ヲ在ラシム半途ニ

児[12]孫ガ達磨ノ方便ノ説ヲ実ト思テ尽ク半途ニアルホトニ、児孫ヲ帯累シタコトソ。達磨ノ本意ニ叶ツタ者無ゾ。憩[13]庵ノ二字ニ合テハ、一二ノ句ハ憩ノ字、三ノ句ハ庵ノ字、四ノ句ハ又憩ノ字也。無[14]レ喘トハ、息ヲモセヌヤウニト云義也。外息ーー内心ーー、如レ此シテ道ニ入フズト云モ、方便説譬喩ゾ。アルヲ、無心ト云ヘバ、息モセズ墻壁瓦礫ノヤウニナルモノヂヤト心得ルゾ。其

【注（131）】

（1）達磨大師……入道＝A句の「外息諸縁」とB句の「内心無喘」の出典を示したもの。達磨が二祖にこのように説いたことは諸書に見えるが、『五灯会元』巻一には「為二祖説法。秖教外息諸縁、内心無喘、心如牆壁、可以入道」（続蔵一三八・一六b）とある。

（2）魚止濼者……深林云＝A句の「魚止濼」とB句の「鳥栖芦」の出典を示したもの。『祖庭事苑』巻六「困魚止箔」の項に「箔、簾也。宝蔵論曰、夫進道之由、中有万途、困魚止箔、病鳥栖蘆。説者曰、此挙事以況漸。言、学者進悟之由也。途、道也。即八万四千之法門、随機各解。如困魚止小箔、病鳥栖蘆叢、雖各得所安、俱未至於大海深林也」（続蔵一一三・三八三a）とある。『祖庭事苑』は『宝蔵論』からの引用を「病鳥栖蘆」で止めているが、このあとに「其二者不識於大海、不識於叢林」と続く（大正蔵四五・一四四a）。「説者曰」末尾の「俱未至於大海深林也」は、これを踏まえたものであろう。

（3）濼者死水也＝A句の「濼」とは「死水」のことである。「死水」は、動きのない水面。『碧巌録』二十則、頌に「死水何曾振古風」とあり、その評唱に「甚処是死水裏。到這裏須是有変通始得。所以道。澄潭不許蒼龍蟠。死水何曾有獰龍。不見道。死水不蔵龍。若是活底龍。須向洪波浩渺白浪滔天処去。此言龍牙走入死水中去」（大正蔵四八・一六一ab）とある。注（9）も参照。

（4）夫称天竺……胡種族＝『祖庭事苑』巻一「滅胡種」の項に「称西竺為胡、自秦晋沿襲而来、卒難変革。故有名仏為老胡、経為胡語、祖為碧眼胡、裔其後者為胡種。為釈氏子、而名胡種」（続蔵一一三・四b）とある。注（10）も参照。

（5）半途者……第七＝D句の「半途」を「憩息」（＝休憩・休息）としたうえで、『法華経』化城喩品の用例を掲げるが、この形では『法華経』化城喩品には見えない。化城喩品に説く「化城」とは、涅槃（＝宝所）に至る途中で止息して精力を養う所。『妙法蓮華経』巻三、化城喩品「於是衆人前入化城、生已度想、生安穏想。爾時導師、知此人衆既得止息、無復疲惓。即滅化城、語衆人言、汝等去来、宝処在近。向者大城、我所化作、為止息耳」（大正蔵九・二六a）の意を約して書いたものか。

（6）如今……碧九十四＝「半途」の用例を示した注。『碧巌録』九十四則、頌に「如今要見黄頭老（咄。這老胡。瞎漢。在爾脚跟下）刹刹塵塵在半途（脚跟下蹉過了也。更教山僧説什麽。驢年還曾夢見麽）」（大正蔵四八・二一七c）とある。

（7）濼或作箔＝『祖庭事苑』は、「濼」を「箔」とする、という注。注釈者は頌の本文に合わせて『祖庭事苑』の「箔」を「濼」に書きかえたか。

（8）達磨ノ……如クゾ＝達磨は（二祖に）「諸縁を絶ちきり、心を動かさなければ、悟りに至る」と教えたが、これも方便にすぎないのに、それを正しいと心得て、本分の宗旨を理解しなければ、魚が静止した水にとどまって大海にたどり着けず、鳥が水辺の芦にとどまって深い林にたどり着けないのと同様である。

（9）藥ハ止水也＝「藥」は「止水」のことである。「止水」は『碧巌録』九十五則、頌に「臥龍不鑑止水」、その評唱に「死水裏豈有龍蔵」（大正蔵四八・二一一八c）とあり、「死水」と同意のことばである。

（10）老胡ハ達磨也＝C句の「老胡」とは達磨のことである。注（4）に引用した『祖庭事苑』によれば、「老胡」は釈迦、達磨は「碧眼胡」であるが、この頌の文脈では達磨とするのがよいであろう。達磨を「老胡」と呼んだ例としては、『碧巌録』一則、評唱の末尾に「只許老胡知。不許老胡会」（大正蔵四八・一四一b）とある。

（11）這般門戸……実城ニアラス＝C句の「這般門戸」とは、達磨の「諸縁を絶ちきり、心を動かさない」という教えをさす。悟りに至る方便として化城（＝悟りへの通過点）を用いたもので、実城（＝悟りそのもの）ではない。

（12）児孫ガ……者無ゾ＝後世の人は達磨の方便を絶対視してしまい、その結果悟りに至らず中途にいることになったので、達磨の教えは後世の人を滞らせたと言えるだろう。達磨の本当の意図を理解できた者はいなかった。

（13）憩庵ノ二字ニ……憩ノ字也＝憩・庵の二字に当てはめれば、一・二句は（悟りに至る途中で休んでいるので）憩の字、三句は（門戸の語があるので）庵の字、四句は憩の字が当てはまる。

（14）無喘トハ……アルモノソ＝無喘とは、息をしないように（心を動かさない）という意味である。「外息諸縁」「内心無喘」も方便で譬喩を用いたのに、無心といえば（文字どおりに）壁や瓦礫のようになることだと理解した者は、本当の悟りには至らず、まだ途中にいるのである。

0132斗山

【京大本略註】

（三十二）婺州ノ雪岩ノ欽和尚

諱[1]祖欽、嗣無準、住江西仰山。

（132）斗山

号也。*斗[2]者、量米之器*也。雲門見僧量米次問、米籮裡有多少達磨眼睛。僧無対。師代曰、斗量不尽。

A平量シ大地ヲ満量ス空ヲ

B屹立ス一方蒼翠ノ中

C大華看来レハ升子計シカリ

D 従教(サモアレ)煙雨ノ自ラ濛々(タルコトヲ)

与レ斗(3)斉ク量ル、謂二之平量一也。斗上ニ高ク量、謂二之満量一也。大華山(4)、高三千六十丈。事林広記云、大*華山在二華州華陰県一。高七千丈、洞周回三千里、名太極幾仙之天。即少昊為白帝治西岳。昔巨霊神手劈其上、足躡二其下一、以通二河流一救二民洪波之難一。上応二井鬼之精一、下鎮二秦地之分一。山頂有池、生千葉蓮華。服(フクスレハ)之羽化、故曰華山。杜詩、一覧衆山小(キナリ)。*(5)春(6)之有草木、山之有煙霞者、其光彩也。

[欄外注]

山(7)谷十六、送密老住五峰詩云、栽松種竹是家風、莫嫌斗絶無来往。注、漢書匈奴伝曰、匈奴有斗、入漢地有張掖郡。注、斗、絶也。後漢書竇融伝曰、河西斗絶、在羌胡中。五峰高峻、故云。

平(8)斗之木曰概。天台止観転(輔カ)行伝弘決巻五下。湛然述。

升(9)者、斗之十分一也。大華、従斗山面前而見之、只十分之一也。杜詩云、一覧衆山小。

大(10)人有大見、不論廉纖、無拘小節■。或云、第三四句者、大機大用也。

[傍注]

C「大華」西岳也。

【出典】

不明。前半二句が『点鉄集』に採られている。

【校異】

＊也―ナシ、＊器也―器也可容十升又云升者十分一也太華山従斗山面前而見之只十分之一也杜云一覧衆山小、＊大―太、＊杜詩一覧衆山小―ナシ

【略註鈔】

（三十二）婺州雪岩欽和尚

（132）斗山

号也。マスノ山ソ。

A平二量大地一満一量空二

斗スニ米ヲ入テ、一文字ニトカキヲ渡シテハカルハ、平量ソ。中高ニ斗ルハ満量ソ。大地ヲハ一文字ニハカリ、空ヲハ中高ニ斗ツタソ。唐音ニ平量満量トモ、又只モヨムソ。

B屹二立一方一蒼翠ノ中

コウモリニ斗ツタ其凸カナ処ガ、其儘山ト成タゾ。屹立ハ、秀出ノ貌也。蒼翠ハ、天ヲ云也。天ニ聳ヘテ秀タソ。是ガ斗山ゾ。此斗山ヨリ見レハ、

C太華看来ハ升子計

太花山ホト高イ山ハナケレトモ、纔カ小升スホトアルソ。

D従教煙雨ノ自濛々タルコトヲ

低イ山ニコソ煙雨モアレ、トツト高イ山ニハ煙雨モ無イソ。トツト高イホトニ煙雨ノ上ニアルソ。定家富士山ヲ題スル歌ニ云、雪ヨリモ上ヘヲハ知ヌ富士ノ根ノ見ユル斗リモ高キ山哉、ト云モ此心ゾ。ホトニ、升子斗リノ太花山ニハ、煙雨モアラウズ。夫レハ従教レ、此斗山ハトツト高イホトニ、煙雨モ無ソ。底意ハ、一二ノ句ハ、縮ル則在レ方寸、展則遍レ沙界ニノ義也。三四ハ、煙雨ハ無明煩悩也。自己ノ家山ニハ無明煩悩ノ煙雨ハ覆ワサルナリ。斗山ノ二字ニ合テハ、一ノ句ハ斗、二ノ句ハ山也。三ノ句太花ハ山也。升子ハ斗也。四ノ句ハ山也。

【注（132）】

（1）諱祖欽……仰山＝雪巌祖欽（？―一二八七）。浙江省婺州出身、無準師範の法嗣。各地の禅寺に歴住、最後は江西省袁州の仰山禅寺に住す。『雪巌和尚語録』四巻がある。

（2）斗者……不尽＝『五灯会元』巻十五・雲門文偃禅師章に「見僧量米次問、米籮裏有多少達磨眼睛。僧無対。師代曰、斗量不尽」（続蔵一三八・二七八b）を引く。雲門が米を計量している僧に、米を篩う箕にはどのくらい達磨の眼があるのか、と尋ね、応えられない僧に代わって「計りきれないほど沢山ある」と答えた、という話。題の「斗」から連想された話柄であるが、内容的には無関係か。

（3）与斗……満量也＝すり切りで（『略註抄』に「トカキヲ渡シテ」とある）量るのを平量、山盛りで量るのを満量という、という説明。フリガナ「ビン」「モン」は、『略註鈔』に唐音とある。

（4）大華山……曰華山＝陝西省にある五岳の一つ、華山。国立公文書館内閣文庫本『新編纂図増類群書類要事林広記』（元刊本）前集巻六・僊境類・三十六洞天に「第四西嶽華山（高七千丈、洞周回三千里、名太極総仙之天。即少昊為白帝治西岳。昔巨霊神手擘其上、足躡其下、以通河流救民洪波之難。上応井鬼之精、下鎮秦地之分。在華州華陰県）」とある（維基文庫に翻刻あり）。和刻本類書集成所収本は編成が異なり、記述はこれよりも簡略。引用との異同、「総」を「幾」（向かい合わせの点四つ＋儿という異体字。寛永版本は「幾」）に作るのみ。

（5）杜詩……衆山小＝『杜工部詩』巻一所収「望嶽」の末句。注（9）参照。

（6）春之……光彩也＝出典不明。D句に「煙雨」とあるのについて、普通ならば山に煙霞があるのはその山の優れたところだが……、と説明するもの。

（7）山谷十六……高峻故云＝『山谷詩集注』巻十六・送密老住五峰の二句およびその注の一部を引用する。注は、山谷詩にある「斗絶」について、漢書（とその注）および後漢書を引き、簡単には行けない場所（遠かったり、急峻だったり）を意味する語であることを示す。なお、引用で「有張掖郡」とあるのは「直張掖郡」の誤り。

（8）平斗……湛然述＝唐・湛然『止観輔行伝弘決』巻五之六に「平斗之木曰概」（大正蔵四六・三二四c）とある。『略註鈔』に言う「トカキ」のこと。

（9）升者……衆山小＝号の斗に引っかけて、華山を斗の十分の一の単位である升のようだ、としたC句の説明。注（5）にも出てくる杜詩を引く。この詩は、五岳の一つ泰山を詠んだもので、（孔子のように）いつか登頂して、周りの山々が小さいのを見てみたいと述べる。同様に華山も衆山にぬきんでているのだが、斗山は更に大きく、斗山を前にすると華山が衆山になってしまう、の意。なお、本文フリガナは「ケシ」とあり、芥子と誤解したか。

（10）大人有……大用也＝CD句は、枝葉末節に拘らない大器量の持ち主であることを表現している、の意。『聯灯会要』巻十一・風穴

延沼禅師章に「示衆云、大凡参学眼目、直須臨機大用現前、勿自拘於小節」（続蔵一三六・三〇八ｄ）などとあるのに近い。なお「■」は汚れのため見えない字。

（11）コウモリニ……是ガ斗山ゾ＝「コウモリ」は「こんもり」のウ音便化か。斗升にうずたかく盛ったのがそのまま山になった、の意だが、A句では空を満量に量る、と言っているので、矛盾する。あるいは、その空にそびえる山、ということでつながるか。

（12）定家……此心ゾ＝芭蕉の弟子支考の俳論書『続五論』に、「富士の雪はただ理をいひて姿あり。理と屈とのさかひは此ほどにや侍らん。／中々に雲よりうへはいさしらず／見ゆるばかりも高き山かな」という付合を挙げていて、ここに引かれるような、当時定家作として流布していた和歌を付合に利用したものか。したがって「雪」は雲の誤りか。

（13）底意ハ……山也＝前半は、小さくすれば一寸四方、大きくすればガンジス川の沙のような無量の世界、という自由自在の働きを喩えたもの、後半は、煩悩も覆い尽くせない大きさ、高さを、雲さえかからない高峰に喩えたもので、前半は「斗」、後半は「山」（C句「升」のみ「斗」を含む）を表す、とする。「縮則……」は出典不明。

０１３３笑峰

【京大本略註】

（133）笑峰　号

A 破顔無語暗蔵刀

B 一段ノ精神五岳高シ

C 可憐ム瞿曇ノ還テ不峭ルコトヲ

D 更ニ抛テ沙土ヲ口チ叨々

世尊在[1]霊山会上ニ、拈一枝花示衆、皆默然。唯迦葉尊者破顔微笑。世尊云、吾有正法眼蔵、涅槃妙心、実相無相、微妙法門、付嘱摩訶大迦葉云々。謂[2]迦葉笑中ニ蔵レ刀、気宇嶮峻、如ニ五岳ノ高一也。還不峭、機不峭峻也*。一[3]枝者、金色鉢羅花也*。

【欄外注】

[4]古語、笑中蔵刀。

[5]五岳者、泰・華・衡・恒・嵩、是也。世尊恁麼道、撒土撒沙、老婆之説也。或云、従前説来底五千四十八巻、総是撒沙土也。

前義為レ好。
八万四千大衆。
⑥唐李義府、貌若温恭、与人嬉怡、而狭険忌克。人謂、笑中有刀。
⑦山庵雑録下、明善韓先生書ニシテ陸放翁普灯録叙草後一云、放翁先生手書普灯録叙草本ハ、報恩浄上人之所レ蔵也。余故有二先生ノ遺文二帙一、其間誤処、皆手自塗乙。伝灯言、世尊拈花、迦葉一咲。今ノ講者以為メ三経無二此ノ事一、詆ル二其ノ妄伝一ナリト。或曰、金陵王丞相於二秘省一得二梵王決疑経一。閲レ之有二此ノ語一。有レ所レ避レ諱。故ニ経ヲ不レ入レ蔵ニ。今先生以テ為レ書ニ之ヲ木葉旁行之間一ニ、不レ知二即丞相之所レ見、以テ否ニ一ナリトスル其言ヲ如レ此。必有レ所レ考矣。併ニ書シテ其後ニ云、夫ノ二先生、学広理明、其言豈レ妄。近翰林宋公為レ余カ叙スルモノニ応酬録ヲ一亦曰、予観ルニ大梵天王問仏決疑経ヲ一、所レ載拈花云々、宋公既ニ親ク観レ之、則此経世ニ必ス有レ之。而或者ノ詆テ以為レ妄ト。前云ク有レ所レ避レ諱、故ニ不レ入レ蔵。斯言尽矣。

【出典】
未詳。

【校異】
＊一枝者金色鉢羅花也―ナシ。

【略註鈔】
（133）笑峰　号ナリ
A破顔無シ語暗ニ蔵ス刀ヲ
⑧世尊ノ拈レ花ヲ示サレタニ、誰モ物云フ者ノモ無イニ、迦葉ノ笑シタハ、底コニ、ヲソロシイコトガアルゾ。笑中ニ活機鋒ガアルソ。
B一段精神五岳高シ
⑨迦葉ノ微笑シタハ、一段ノ精神ソ。其ノ精神ノ高イヲ、

【傍注】
C句　多口也。

喩ヘハ五岳ノヤウナソ。ヲソロシイニ云ハ、刀、高ヒニ云ハ、五岳ゾ。

C可レ**憐瞿曇ノ還**テ**不**ルコトヲ**峭**ナラレ(10)世尊ノ四十九年説法シタハ、峭峻ニモ無イ、アマリニ低イソ。

D更抛テ**沙土**ヲ**口叨々**

撒(11)シ土ヲ撒シ沙ヲテ、口叨々ト、ムタト説法セラレタハ、可レ憐ムトナリ。可レ憐ハ、可レ哀ノ義也。世尊ヲ抑(12)シテ、迦葉ヲ托上シタハ、笑峰ヲ托上セン為也。笑(13)峰ノ二字ニ合セテハ、一ノ句ハ、笑也。二ノ句ハ、峰也。三四ノ句ハ、峰也。口叨々ト云処ニ、少シ笑ノ字モアリ。叨々ハ。多口ノ貌也。

【注（133）】

（1）世尊在霊山会上……摩訶大迦葉云々＝A句の注。拈花微笑の公案。種々の灯史・語録等に見えるが、『聯灯会要』巻一釈迦牟尼仏章に、「世尊在霊山会上、拈花示衆、衆皆黙然。唯迦葉破顔微笑。世尊云、吾有正法眼蔵、涅槃妙心、実相無相、微妙法門、不立文字、教外別伝、付嘱摩訶迦葉」（続蔵一三六・二一〇d～二一一a）とあるのが典拠か。

（2）謂迦葉笑中……機不峭峻也＝CD句の注。釈尊が一枝の花をふと取り上げて大衆に示した時、迦葉尊者のみが破顔微笑した、その笑いには人の命を奪うほどのすぐれた機鋒があり、その境界は高く険しい五岳のようである。これに対して、釈尊の接化説法は高い境界とは言えない、の意。釈尊を抑下し、迦葉尊者を托上する。

（3）一枝者金色鉢羅花也＝「金色鉢羅花」は、金色に輝く優鉢羅華の意。優鉢羅は、梵語「utpala」の音訳、睡蓮の一種とされる。後掲の『山庵雑録』巻二に「始於釈迦世尊、在霊山会上、拈起一枝金色波羅華、普示大衆。惟迦葉微笑」（続蔵一四八・一二五a）と見える。

（4）古語云笑中蔵刀＝典拠未詳。

（5）五岳者……前義為好＝機鋒の鋭利さを刀に、境界の高さ（峭峻）を五岳に喩える。「五岳」は、中国の五つの霊山、泰山（東岳）・衡山（南岳）・華山（西岳）・恒山（北岳）・嵩山（中岳）をいう。一説は、釈尊一代の教化説法は、土塊や塵沙をまき散らした様な（用に立たない）ものであり、慇懃な老婆親切の説である。従前より釈尊が説

き来たった、一代蔵教は、総て沙土まき散らしたものに過ぎない。前説がよいの、意。「五千四十八巻」は、「一切経」を指す。大蔵経を「千七十六部、五千四十八巻」とするのは、唐、智昇『開元釈教録』（開元十年〈七二二〉）に基づく。

（6）唐李義府……笑中有刀＝寛永本も、この一文を題注に記すが、『訓解添足』は、「東陽之本、為ニ傍註一〈註ニ笑ノ字一、起句ノ注〉、後人誤入ニ題注一」とする。李義府（六一四年～六六六年）は、容貌は穏和で慎み深く、人と話にも楽しげで笑いを絶やさなかったが、性格は陰険狡猾で、才能を妬み中傷したことから、時人は「笑中に刀有り」と評した、の意。『古今事文類聚』後集巻二十一「笑中有刀」の項に、「李義甫容貌温恭、与人語必嬉怡微笑、而狡険忌剋。故時人謂義甫笑中有刀」とあるのが典拠か。『旧唐書』巻二百二十三「李義府伝」には、「義府貌状温恭、与人語、必嬉怡微笑、而褊忌陰賊。既処権要、欲人附己、微忤意者、輒加傾陥。故時人言、其笑中有刀」と見える。ほかに『資治通鑑』巻二百、『氏族大全』巻十三、『太平広記』巻二百四十等に見える。「笑中有刀」は、禅籍に頻出する。一例を挙げれば、『碧巌録』第三十五則頌古評唱に「堪笑清涼多少衆、雪竇笑中有刀」（大正蔵四八・二九a～b）とある。又、『句双紙抄〔16C頃〕』に「笑中有刀〈ワラウ中ニ刀ヲ、キツトカクイテ持ヤウナ、ヲソロシイ句中ナリ〉」と注する。

（7）山庵雑録下、……故不入蔵斯言尽矣＝『山庵雑録』巻二（続蔵一四八・一八一d～一八二a）に見える。「龍門文庫本」は、「此ノ拈花微笑ノ事ハ諸経ニミエス。王荊公カ、大梵天王問仏決疑経ヨリ看出ス也」として、『人天眼目』下巻の「拈花」項を引用する。「王荊公問仏慧泉禅師云、禅家所謂世尊拈花、出在何典。泉云、蔵経亦不載。公曰、余頃在翰苑、偶見大梵天王問仏決疑経三巻。因閲之、経文所載甚詳。梵王至霊山、以金色波羅花献仏。舎身為床座、請仏為説法。世尊登座、拈花示衆。人天百万、悉皆罔措。独有金色頭陀、破顔微笑。世尊云、吾有正法眼蔵。涅槃妙心、実相無相、分付摩訶大迦葉。此経多談帝王事、佛請問、所以祕蔵、世無聞者」（大正蔵四八・三二五b）。

（8）世尊ノ拈花……活機鋒ガアルソ＝迦葉の破顔微笑には、鋭い機鋒が蔵されていることをいう。「ヲソロシイコト」とは、殺人刀が蔵されていることを言うか。「龍門文庫本」は、「コ、ノ言ハ、迦葉ノ、拈花ヲ見テ、物モイワイテ、微笑シタ中ニ、刀ヲ蔵ス心アリ」とあり、『襟帯集』は、「一ノ句、仏ノ拈花ヲ示サレタレ共、誰モ物ヲ言者モナイ処ニ、迦葉ノ笑テ、物ヲ云ワヌカ、此ニヲソロシイ刀カアル也。殺人呈ノ刀ヲモツタワ、李義府カ笑中ニ有刀ノ心ソ」と注する。

（9）迦葉ノ微笑シタハ……高ヒニ云ハ、五岳ゾ＝迦葉の破顔微笑に、一段高い心地を示すものであり、その峭峻な境地を五岳の高く秀でることに喩える。迦葉を托上して言う。前注（8）その畏怖すべきには刀、その高きありようには五岳の措辞を用いる、の意。

（10）世尊ノ四十九年……アマリニ低イソ「龍門文庫本」は「可怪ーー、瞿曇ノ四十九年ノ説ハ、ワケモナイ哆唎言ソ。更ニ峭峻ノ機ハナキ也」

とし、『襟帯集』も同様の解釈をする。

(11) 撒土撒沙テ……可憐トナリ＝「撒土撒沙」について、「龍門文庫本」は「沙土ハ、仏ノタワ言ヲ、沙土ニ比シテ、用ニ不レ立ニ譬フ」と注する。「ムタト」は、「ムツタト」に同じ。やたらめたらに、の意。「口叨々」について、『襟帯集』は、「口叨々ト、口ガマシウ云ワレタソ」とし、「龍門文庫本」は「何ノ用ニモタ、ヌ言ヲカシマシウ説レタソ」と注する。老婆心切に口やかましく説かれた釈尊は、憐れむべきである、の意。

(12) 世尊ヲ抑シテ……笑峰ヲ托上セン為也＝世尊を抑下して、迦葉を托上するというのは、作者自らを師家として釈尊に擬え、弟子笑峰を迦葉に擬える。俺はお前にとってやくたいもない存在だが、お前の笑みの中にやどる峭峻な機鋒だけは垣間見たつもりだ。だから、お前にこの号頌を送る、の意を含有するか。

(13) 笑峰ノ二字……少シ笑ノ字モアリ＝頌の構成について、笑峰の二字に合わせてみれば、第一句は「笑」を、第二の句は「峰」を、第三四の句は「峰」を頌しており、「口叨々」に少し「笑」を含むか、の意

0134送人之廬山

【京大本略註】

(三十三) 江西南洲珍和尚

(1)万寿、南洲永珍。嗣石渓月。洲或作州。

(134) 送人之廬山

(2)廬山、々南ハ是南康軍、山北ハ是九江郡、山中有二三百六十余寺一、天下第一ノ勝地也。

A 耆宿ノ門庭已ニ徧参

B 三々非レ九ニ隻非レ単ニ

C 石房秋ギ晩ル帰来ノ日

D 満面ノ風霜五老寒カラン

(3)三々至非レ単者、謂三事無ニ一向一也。*(4)五老峰、在ニ匡山栖賢ノ寺后一ニ、其状如ニ五老人ノ相揖スルカ。(5)古人ノ頌云、不ハ*到ニ廬山一ニ不ニ是レ僧一ニ、到ニ得モ廬山一ニ也タ是レ能。苦蕒ショク菜羹ゼン苦米飯、如今思量スレハ也頭ツフ癖。*(6)々者痛也。癖、韻会注、痛病。集韻、本作瘵。

(7)爾雅、蕢、牛脣、如続断、寸々有節、抜之復生。

【欄外注】

蕢、祥玉切。

(8)水草、詩曰、采其丨、説文、水鳥也。从艸壳声。

(9)□□匡廬山、廬山記云、昔匡真先生居于此、其廬在此、故云丨丨丨。

(10)五老峰、廬山五老峰。昔堯遊首陽、々々当廬山東南。有五老人、鬢鬚皓然、意気高閑。堯召而欲令仕。老人咲飛登入昴星中。後人、名山為五老峰、云云。

(11)第二句、三々九也。隻単也。因甚云非耶。打破尋常理致、可以会取去耳。或(12)云、一多自在之義。賓主交参処、一多無碍、一即一切、々々即一也。

(13)前三々後三之機乎。

【出典】

未詳。

【校異】

＊也―也又云前三々後三々之機乎　＊后―後　＊苦―苦　＊癤―瘵

＊爾雅蕢牛脣如続断寸々有節抜之後生―ナシ

【略註鈔】

(三十三)　江西南洲珍和尚

(134)　送ニ人ノ之ク一レ廬山ニ

A耆宿門庭已ニ徧参

名衲耆宿ノ処ヲ、徧参シテアルイタソ。

B三々非ス九ニ隻非レ単ニ

(14)三々非レハ九ニ三々デモ無ク、隻非レハ単ニ隻デモ無ソ。事一向モ無イ底ソ。未悟以前ハ色々ノコトガアツタガ、

悟テ後ハ何ッテモ事ハ無ソ。又三々ーートハ、数量ニ落ヌ義ソ。前三々後三々ノ境界ソ。

C石房秋晩帰来ノ日

此[15]僧、廬山カラ石房ヘ帰来ル時分ハ、

D満面風霜五老寒シ

五大峯ハ満面ノ風霜デ、寒々トシヤウソト云ハ、其侭ノ現成マデソ。事無レ一向処ニ至テ見レハ、山ハ是山、水ハ是水迄ゾ。[16]又廬山ニ帰ルヲ送ルト云心ニモ見ルソ。其時ハ石房秋晩ーートハ、廬山ニ帰ル義ソ。廬山ニ白石僧房ト云ガアルゾ。ソチガ廬山ヘ帰ラレタ時分ハ、秋晩ノ時分デアラウズホトニ、満面ーー寒ントナリ。山ナレトモ、五老ト云ヨリ満面ト云也。此[17]説一二ヨリ連続シテヨイゾ。一ノ句ニ徧参シテアルイタ底ヲ云テ、二ノ句ニ悟タ処ヲ云テ、三ノ句ニ帰家穏座ノ処ヲ云テ、四ノ句ニ現成本分ノ底ヲ頌シタソ。又三々ーー、色々ノ説ガ多イソ。理致数量ノ間ヲ打破セン為也。又一多自在ノ義、一即一切、々々即一ノ義也。

【注（134）】

（1）万寿……洲或作州＝南洲永珍は松源下四世。『増集続伝灯録』巻五に「蘇州万寿南州珍禅師」章（続蔵一四二・四二一ｄ）あり、上堂語三種が見える。また同録により万寿寺以前に廬山開先寺に住していたことが知られる。

（2）廬山……第一勝地也＝廬山の地誌を示す文章。廬山、南康軍、九江郡とも現在の江西省に位置する。古代より山岳信仰の名勝として知られ、四世紀に慧遠が東林寺をここに建立するなど、仏教信仰の名山としても著名。『廬山記』、『方輿勝覧』巻十七「南康軍」等に廬山の記事はあるが、注本文と同一の文章は見えない。典拠未詳。

（3）三々至非単者……無一向也＝B句の注。「事無一向」とは、ものごとは定式化された一つの答えだけに収まるものではないことをいう。『円悟録』巻九「雖然如是、事無一向、理出多途」（大正蔵四七・七五二ａ）、『石渓心月録』巻一「事無一向、智有千差、有時丁一卓二、有時放両拋三」（続蔵一二三・三二ｄ）ほか禅録に頻出する。廬山へ行く禅僧が、諸方の師家を徧参した結果、そのような自由無碍の境涯に至ったことを言うもの。

（4）五老峰……五老人相揖＝廬山の五老峰に関する説明文だが、『廬山記』、『方輿勝覧』巻十七「南康軍」等にこれと同一の文章は見えない。棲賢寺の名前のみえるものとしてはは、『祖庭事苑』巻三「五老師子」に「廬山記云、棲賢寺、寺之東北有五老峯。歴歴可数、中有師子峰。状若刻削、雲物隠映、尤所肖似。廬山之勝、此最為優者」（続

蔵一一三・四三d）と見える。なお廬山および五老峰は、禅宗においてしばしば本来の仏法の在処を暗示する場所として登場する。たとえば『碧巌録』第三四則・本則に「舉。仰山問僧、近離甚処。僧云、廬山。山云、曾遊五老峯麼。僧云、不曾到。山云、闍黎不曾遊山。雲門云、此語皆為慈悲之故。有落草之談」（大正蔵四八・一七二c）と見える。

（5）古人頌云……也頭癚＝廬山に至り得てこそ僧である、到らざるもまたよし、三句目の意味は未詳、四句目はそのようなことを考えるものまた頭痛のタネという意味か。典拠は未詳。一句目については南洲の師、石渓の語録『石渓心月雑録』巻一「送珙上人之廬山」に、「不到廬山不是僧、斯言斯語亦何会、珙今興尽還帰去、五老依前倚碧層」（続蔵一二三・七二b）と見える。三句目について、苦蕢は植物・オモダカの種類であり、苦蕢菜羹はその調理名か。また苔（あるいは苦か）米飯は不詳。京大本の文字通りに取れば意味は通じにくい。だが『古尊宿語録』巻第二十六「舒州法華山挙和尚語要」章に「学云、未審林下事如何。師云、苦益菜羹粟米飯」（続蔵一一八・二四五a）と見え、ここでは質素な日常の食事と言うほどの意味。もしこの句の写誤だとすれば、頌の意味は、廬山に到るも到らざるも本質的な問題ではなく、日常底のあり方が大切であり、そのようなことを考えるのは頭痛のもとだ、という意味にとれる。

（6）頭癚……本作瘵＝『古今韻会挙要』巻九「平声十／騰」に、「癚、痛病。集韻、本作瘵」と見える。『訓解添足』にこの注を指して、「此十五字、非此頌註。蓋上傍注本註」と見え、もと上段の傍注にあったものが、本文中に組み入れられたものと推定している。

（7）爾雅……有節抜之後生＝『古今韻会挙要』巻二十五「入声二／続」に「蕢、説文、水鳥也。从艸売声。詩言、采其蕢。爾雅、蕢、牛脣。如続断、寸寸有節、抜之復生」と見える。本詩との関係は不明。注（6）参照。

（8）水草……从艸売声＝蕢の注の一つ。注（7）参照。

（9）□□匡廬山……故云ーー＝廬山の名称由来を説くもの。かつて周の武王の時、匡俗がこの山に隠れ住んでいたところへ、使いをやったところ、すでに登仙して空廬のみ残っていたことから廬山、また匡廬山と呼ぶようになったという。『廬山記』巻一に、「山海経云、廬江出三天子都。一日天子障故旧語、以所浜為彭蠡。有匡俗先生者、出自殷周之際、遯世隠時潜居其下。或云、俗受道仙人。共遊此山、遂託空崖、即巌成館。故時人謂其所止為神仙之廬。因以名山焉」（大正蔵五一・一〇二五a）と見えるが、同書に注本文と同じものは見えない。『廬山記略』（宋代）にも見えず、典拠未詳。

（10）五老峰……為五老峰云云＝五老峰の名称由来を説く。堯帝が廬山で五人の老人に遇い、仕えさせようとしたところ五人は笑って昴星中に飛び去ったという故事から五老峰と呼んだというもの。『廬山記』、『方輿勝覧』巻十七「南康軍」、『祖庭事苑』巻三「五老師子」等とは異なるもの。出典は未詳。『首書』注も同文を引いている。五老と昴星の故事は、『宋書』志第十七巻「符瑞志上」中の「有五

老游焉。蓋五星之精也。相謂曰、河図将来告帝以期、知我者重瞳黄姚。五老因飛為流星、上入昴」に類似する。

(11) 第二句……可以会取去耳＝三三は九であり、隻は単であるのに、なぜそれを「非」というかというB句の注。尋常の理智を打破したところで会取すべきという。『夾山抄』にも、「古抄云、此句打破学者執見也。纔言三三則滞在於九也。故謂非九而破九之見。又纔言隻則滞在於単也。故謂非単而破単之見也。碧巌第一巻云、一有多種、二無両般之謂也。是即師家為学者解粘、云縛手段也。如是破尽諸見了、見到無見之處。即是好箇時節也」と見える。

(12) 或云……々々即一也＝B句のもう一つの注。一と多、賓と主、一と一切等、いずれも相対する価値が自由無碍に互換可能な境地を示すもの。「一即一切、一切即一」の句は、『華厳経』に特徴的な教えを示すものと言われるが、禅宗にも受用され、禅語として多く用いられている。『宗鏡録』三十四巻「又云、一念知一切法也。是以一即一切、一切即一。故云、以一之法、功成万像」（大正蔵四八・六一二c）、同書九十五巻「以一成多、用諸義而発一義、以多成一。一成多而用遍、多成一而体融、体用交羅。一多自在」（大正蔵四八・九三三a）、『円悟録』一巻「師云、話作両橛。乃云、遠問近体。萬世如今。挙東明西。千途一轍。無事上演事。無為処作為。非色非声青黄順逆。非心非仏賓主交参。全承此箇威光。不在別処流転」（大正蔵四七・七一六a）等とみえる。

(13) 前三々後三之機乎＝注の文章「三々」に施された傍注。「前三々後三之機」とは、五台山にて文殊菩薩が無著文喜の問いに答えた言葉として知られるもの。『碧巌録』第三十五則・本則に、「無著問文殊、此間如何住持。殊云、凡聖同居龍蛇混雑。著云、多少衆。殊云、前三三後三三」（大正蔵四八・一七三b）と見える。この句は禅録に散見され、「前三後三」、「前後三三」とも言われる。［**補説**］に示したように原義は別にあるが、「後世これに深遠な意味づけが加わって〈数量では計れぬ根本智の消息〉などと説かれる」（『禅語辞典』）ようになったという。この傍注もその意味と思われる。

(14) 三々非九……事ハ無ソ＝B句について「事無一向」の立場から注するもの。注（3）で取りあげた「京大本」と同じ趣旨だが、未悟と悟後に分けて詳しく解説しているもの。

(15) 此僧廬山カラ……水是水迄ゾ＝C句を廬山から石房に帰る意と取る。その上でD句を、ありのままの姿が本来の現成したところという。「山是山、水是水」の解釈は『襟帯集』にも見える。ただし『訓解添足』には「或見自廬山帰此方石房者、非也。此泥帰字説也。先行亦言帰也」とあり、廬山から石房に帰ると取意する説を批判している。

(16) 又廬山ニ帰ルヲ……満面ト云也＝注（16）とは反対に、C句を廬山に帰り行くを送る意と取る。廬山の「白石僧房」については、『増刊校正王状元集註分類東坡先生詩』巻二十四所収の「書李公択白石山房」に「偶尋流水上崔嵬、五老蒼顔一笑開、若見謫仙煩寄語、匡山頭白早帰来」という詩があり、その註に「五老即廬山五老峯。公

択少時、読書於五老峯下白石庵之僧舎。先生嘗作李氏山房蔵書記、正謂此也」と見える。なお『廬山記』巻二「敘山南篇第三」（大正蔵五一・一〇三五C）でこのことに触れており、そこには旧名「下白石」と呼ばれた楞伽院に李氏の山房のあったことが記されている。なお『略註鈔』は五老峰は山であるが、五人の老人が相揖する姿という擬人化になぞらえて「満面」と表現した詩の修辞を指摘しているが、『夾山抄』には、前述の蘇軾詩を引いて「坡詩云、五老蒼顔一笑開。又云、不識廬山真面目、只縁身在此山中。拠坡詩、則満面字、五老峰之満面也」と見える。

（17）此説一二ヨリ……底ヲ頌シタソ＝注（17）のように、C句を廬山に帰り行くを送る意と取れば、詩全体が、A句は徧参、B句は悟り、C句は帰家穏座、D句は現成本分をそれぞれ頌するものであり、四句による詩全体が連繋して構成されているさまを「連続シテヨイゾ」と称美するもの。

［補説］

「前三三後三三」について。『禅語辞典』はこの語について、「『玄沙広録』巻中に、招慶院を訪れた玄沙が麟上座に〈什麼生（なんと立派な）一院だ。寮舎（僧堂）は幾つあるか〉と尋ねると、麟は〈前六後六〉と答えたとある。〈前に六棟、後ろに六棟〉という意で、ぎっしりと立ち並んださまをいう。それらには修行僧が満ちているという含みであるが、その盛大な賑わいぶりをいうのであって、その内実は別である。これがこの語の原義であろう。後世、これに深遠な意味付けが加わって、〈数量では計れぬ根本智の消息〉などと説かれるが、原義は別である」と解説している。末木文美士『現代語訳碧巌録』においても、第三十五則にある同句の注は、この解説を受けて「なお、早くから前三三後三三の意味がわからなくなっていたことは、評唱に引く話で、無著が均提童子にその意味を問うていることからも知られる」としている。